

秘書晁監の日本国に還るを送る（王維）

積水 極む べからず

安んぞ 知らん 滄海の 東を

九州 何れの 処か 遠き

万里 空に 乗ずるが 若し

国に 向って 惟だ 日を 看

帰帆 但だ 風に 信す

鰲身 天に 映じて 黒く

魚眼 波を 射て 紅なり

郷国 扶桑の 外

主人 孤島の 中

別離 方に 域を 異にす

音信 若為ぞ 通ぜん

積水不可極	安知滄海東
九州何処遠	万里若乘空
向国惟看日	帰帆但信風
鰲身映天黒	魚眼射波紅
郷国扶桑外	主人孤島中
別離方異域	音信若為通

解説 阿倍仲麻呂の帰国に対して王維が述べた詩。

語釈 ※積水Ⅱ海のこと。※滄海Ⅱおおおとした広い海。あおうなばら。※九州Ⅱ世界の九つの州。※日Ⅱ太陽。※帰帆Ⅱ帰途につく船。※鰲身Ⅱ大海亀の胴体。※魚眼Ⅱ大魚の眼。※扶桑Ⅱ東方の島にあり、日の出る所にあると伝えられた神木の名。のち、その木の生えている土地をいう。転じて、日本を指す。※音信Ⅱ便り。手紙。

通釈 大海の果ては極めようがなく、大海の東の日本のことをどうして知ることができよう。世界には九つの州があるそうだが、その中で日本が一番遠いのではないか。その国に帰る君の船は虚空へ万里も乗り出すようなものだ。その国に向かつてただ太陽を目当てとし、帆を風任せにして帰っていく。大海亀の背が天に映えて黒々と見え、怪魚の眼が波を射るように赤く光っているだろう。君の故国は扶桑の樹のあるところより更に遠く、君は孤島の中に住むことになるのだ。ここで別れてしまえば、別の世界の人となり音信はどうして通じたらよいのだろうか。